



羨望の職業を 追え!

テレビディレクター編

取材・文/新保京子 撮影/高木亜樹

今や私たちの生活の一部となり、たくさんの感動を与えてくれるテレビ。その制作に携わる「TVディレクター」の仕事とはいったいどのようなものなのだろうか。また、ひとつひとつの番組にはどのような思いが込められているのだろうか。

今回は、日本放送協会（NHK）の人気番組、「プロジェクトX」唯一の女性ディレクターとして活躍中の池田由紀さんと、NHKマルチメディア局担当局長の佐藤寿美氏にお話を伺いました。

人が好き。 だから、人のドラマを作り続けたい！

いろいろの方と出会い、その生きざまを知って、元気になる！

心を開いて本音を話していただけたときの喜びはひとしお

大変な思いをしても、また作りたくなるから不思議です

ディレクターの仕事は、ひと言でいえば、1本の番組を作り上げること。民放の場合は番組のコーナーごとにディレクターがいますが、「プロジェクトX」では番組の最初から最後まですべて一人のディレクターに任

ず。1本の番組の制作期間は3〜4カ月。番組のテーマを決め、取材・ロケ・構成・編集、収録という順序（左ページ参照）を進めていきます。特に取材では、ふだんはお会いできないような、さまざまな道で活躍されている方々にいろいろなお話を聞いていただけるので、とても楽しいですね。取材といっても、一度では終わりません。誰でも見知らぬ人間にすぐ本音を話してくれるわけはないので、私という人間を信頼していただけるよう、相手のところへ何度か足を運びます。そうして信頼関係が築けて初めて、本音で話していただけるようになるのです。

さまざまな苦労話やエピソードを聞くと、その仕事にかけたその方の思いがひしひしと伝わってきます。「この感動を視聴者に伝えたい」そんな気持ちでいつも番組を作っています。

途中でうまくいかなくて投げ出したくなっても（よくあります。笑）、取材相手の話を思い出すと、またがんばれる。視聴者の皆さんから「元気にになりました」というお便りをよかったですね。私自身もすごいパワーをもらっているのです。

私がこれまで「プロジェクトX」で担当した番組は、「幸せの鳥トキ 執念の誕生」（2002年7月9日放送）と「幻の絵巻復元 ニューヨークの激闘」（2003年11月11日放送）の2本です。

トキの話は、まだ新潟局にいたときに担当しました。取材させていたただいたトキ保護センター長の近江さんは、トキの繁殖に失敗するたびにさんざんマスコミに叩かれてきたので、マスコミに対して不信感をお持ちだったようで、取材は難しいと言われていました。私も最初は、なかなか思うように取材が進まなかったのですが、『これが取材最後の日』という晩に、人工繁殖を決定したときのつらさ、飼育していたトキが次々と死んでいったときの絶望感、周囲に非難され街に出るのさへ怖かったことなど、繁殖に成功するまでの30年分の気持ちを、心を開いて話していただきました。このときは、本当に嬉しかったですね。

スタジオ収録にもいらして頂いて、終わってあと、楽屋にご挨拶に行ったら、涙を流していらつしゃったんです。VTRを見ていろいろなことを思い出されたのでしょうか。それを聞いて、「ああ、本当に辛い思いをされたんだなあ」と改めて思いました。あの番組でその思いをすべて表現しきれたかどうかは疑問ですが、近江さんご自身に喜んでいただけたことは、何よりも嬉しいことでした。

時差のため夜中に電話していたので、かなり寝不足でしたけど、くたくたに疲れたり、番組作りが思うようにいかず落ち込んだりしていても、電話で阿部さんにお話を聞くと、不思議と元気になることができました。30年以上も前のことを一所懸命に思い出して話してくださるので、「この気持ちに込めなければ」という気持ちになりました。

失敗はしょっちゅうなんですけど、こんなことありません。ニューヨークのロケでは、取材許可を取った上でメトロポリタン美術館に取材に行ったら、急に「NO!」といわれてしまっ

た。この話を聞いて、阿部さん「アメリカに住んでいらつしゃる方なので、取材は全て電話でした。ロケに行くまで、主人公にお会いしたことがないなんて、私にとっては前代未聞（笑）、とっても不安でしたね。時差のため夜中に電話していたので、かなり寝不足でしたけど、くたくたに疲れたり、番組作りが思うようにいかず落ち込んだりしていても、電話で阿部さんにお話を聞くと、不思議と元気になることができました。30年以上も前のことを一所懸命に思い出して話してくださるので、「この気持ちに込めなければ」という気持ちになりました。



は表せません。あんなに苦労したことも、番組ができあがるとコロコロと忘れて、また次の番組を作りたくなるから不思議です。

担当ライターよりひとこと!

あれほどの番組なので、制作期間も取材スタッフの数も膨大だと思っていたら、意外!制作期間4カ月で、取材から何からすべてディレクターが行うとは驚きでした。失敗談や苦労話をしながらも、池田さんの語り口は楽しそう。ディレクターという仕事に本当に好きで、その仕事に誇りを持っていらつしゃるのだとわかりました。制作の裏側を知って、また違った目で「プロジェクトX」を楽しめそうです。

限られた時間の中でよりいいものを...番組制作に携わる人々の熱き思い

編集の仕事では、3週間くらい会社に缶詰状態。毎日夜遅くまでかかるので、編集作業を終えるころは、目の下にクマができてすこい顔です（笑）。「ようやくできた」と思っても、なかなかOKは出ません。話の流れを何度も練り直し、コメントも書き直します。プロデューサーはもちろん、音楽をつける音響効果の方

「プロジェクトX〜挑戦者たち〜」とは

戦後の日本を劇的に変えたさまざまなプロジェクト。それらのプロジェクトの成功を支えた無名の人々にスポットをあてたドキュメンタリー番組。プロジェクトそのものを紹介するのではなく、その成功の舞台裏で、熱い情熱を抱き数々の障害を乗り越えた人々のドラマを描いて、2000年3月の放映開始以来、幅広い視聴者に支持されている。社会の片隅で一生懸命生きる人々のエネルギーやひたむきさに加え、田口トモロヲの淡々としたナレーションと中島みゆきの歌う主題歌のしみる旋律も魅力の一つ。今年5年目を迎えた番組は、これからも勇気と感動を与え続けてくれるだろう。毎週火曜日、午後9時15分からNHK総合テレビで放映中。

池田さんの担当された放送の概要

第91回 2002年7月9日放送
「幸せの鳥トキ 執念の誕生」
トキ。学名ニッポニアニツボン。かつてアジアの空で、数百万羽が薄紅色の美しい羽をはばたかせていた。「トキを見つめると幸運が訪れる」アジアの人々にとってトキはかけがえのない鳥だった。しかし20世紀に入り、環境が激変。戦後、佐渡と能登半島に僅かに残るのみとなった。「幸せを運ぶ鳥を守ろう」アジアの鳥を蘇らせよう、半世紀にわたって執念を燃やし続けた、国境を越えたドラマ。



DVD発売中
発売元: NHKソフトウェア

第130回 2003年11月11日放送
「幻の絵巻復元 ニューヨークの激闘」
世界三大美術館の一つ、ニューヨーク、メトロポリタン美術館。その「ジャパニーズルーム」（日本の間）は、日本の屏風絵や浮世絵など2万点のコレクションを誇る。これらの多くは、敗戦直後、GHQ等の手で日本から持ち出されたもの。和紙と絹で作られた繊細な日本絵画の扱いを知る者はなく、傷み放題だった。後世に伝えるには、数十年に一度の修復が不可欠。その特殊な技術を持つ、京都で1,300年前から技を受けついできた修復師達のドラマを描く。



スタジオ収録の様子。
©日本放送協会

羨望のプロフェッショナル 池田さんの PERSONAL DATA

PROFILE 池田 由紀 (いけだ・ゆき)

日本放送協会 番組制作局情報番組センター「プロジェクトX」ディレクター
1973年東京生まれ。
東京学芸大学教育学部附属高校出身。
慶應義塾大学法学部政治学科卒、同大学大学院法学研究科政治学専攻修了。
NHK入局後、4年間の新潟放送局勤務を経て現在の部署に。



池田さんに聞く! 「私の学生時代」

高校以前に熱中していたこと
中・高とテニス部で、真っ黒になって練習していました。高校の時、東京都大会に出たのですがベスト32で破れてしまい悔しかったですね。文化祭の委員長などもやって、わりと活発でしたよ。

高校時代になりたかったもの
語学力を活かした仕事・翻訳などやってみたいと思っていたような...

高校時代の得意科目
日本史と英語

大学時代に熱中していたことは?
テニス部に入っていました。また、国際政治の研究会にも所属していました。